

第0 特務科の日常

ノワール105

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

海軍の心臓とも呼ばれる大本営

そのトップに立つ元帥

そして元帥お抱えの特務科

本来、特務科は1課から3課あり

それぞれに、憲兵団が大体規模で着いているが、

第0特務科は違うそもそも平均から逸脱している人や

艦娘を集めたのが特務科でありその中でもかなり逸脱している者

を集めたのが第0特務科

着いている憲兵団は1個師団だが彼らが動く事はまず無い

理由は1つだけ第0の中核にいる人物達が強い為

そんな彼らの他愛もないほのぼのとした日常生活の物語

目次

第3話
第2話
第1話

14 9 1

第1話

〈大本営第0特務室〉

「すいません。龍神白連中將は居ますでしょうか？」

「淀さんじゃないすかつ!!チーッス(。・ω・)ノ」

「漣、挨拶はちゃんとしなさい！」

「いーじゃないですか。ご主人様なら外すつよ。」

「おっ淀さんチーッス(。・ω・)ノ」

「貴方まで何してんですか。」

『ここの大淀さんが喋りやすいのが悪い。』

「全くそれより中將、元帥がお呼びです。」

(*・ω・)ゞ

「顔文字だけ書いて行くな!!」

留守番よろしくお願いしまーす。 by漣

「してやられました。」

〈元帥執務室〉

「失礼します。呼び出しに応じ参上しました。」

「あれ大淀は？」

「特務室で留守番してるっス。」

「お前いつ来た？」

「出たと同時に諜報活動用のダクトを通って。」

「あゝ。」

「なるほどまあいい。それより中將には

呉の第2鎮守府に提督として着任して貰いたいの。」

「呉の第2って今うちの川内が潜入調査してるここ
ですよね。」

「その川内から証拠が届いたから。」

「なるほど。早い話、提督殺して乗っ取れと。」

「そうなるわね。」

「第1は了承してるんですか？」

「了承得てるしぶつちやけ第1だけで平気だつて。」

「じゃあ鎮守府移動させちやつていすつか？」

「場所によるわよ。」

「小田原か熱海辺りに。」

「いいけど、何故そこに？」

「元帥は弾薬の材料である火薬の作り方は

知ってますよね。」

「知ってるわ。なるほど箱根を抑える訳か。」

「それとうちが入手した

情報ですが箱根の研究施設が怪しいとの報告が」

「具体的には生体実験が行われてるそうです。」

「分かったわ。こちらの権限を使って

潰していいわよ。」

「了解しました。では失礼します。」

「あつ私からの饞別よ。」

「こつちの第六駆逐隊連れてつていいから。」

「いいんですか？」

「良いも何も君に懐いてるし。」

「なるほど近々また鎮守府を何処かに作ると。」

「何でその事知ってるの？」

「私達は特務科ですよ。」

大方、新しく初期艦組の一人を

建造するからよろしくつてとどこですか。」

「ではこちらからも、間宮さん呼んで貰えますか？」

「ちよつとまつてて。」

「お呼びでしょうか元帥。」

「中将がちよつと用があるつて。」

「何か御用で？」

「いえいえ間宮さんにこれを渡して置こうと。」

「これは？」

「新しく考えた料理のレシピと

今まで作った料理のレシピ集です。

これを大本営の食堂に置いて欲しくて。」

「分かりました。」

いつもありがとうございます (*。▽。*)」

「後、これは個人的にですが俺が使ってる

柳刃包丁欲しいって言ってましたよね？」

「まさか。(；・▽・)」

「お下がりが良いならひとつ前の形の奴を。」

「お下がりが良いです!!ください。!! (´・ω・´)」

「ちなみに中将の今の柳刃包丁は？」

「見ます？」

「見たいです!!」

「私にも見せて。」

「元帥は最近見つかった色代鉄って知ってますよね。」

「あー素材研究科の奴らが新しく見つけた奴ね。」

「って何で君がそれ持つてるの？」

「素材研究科から作り方が保存されているデータを

コピーして工場で夕張達と一緒に作ってました。」

「で出来たものを包丁に応用したと。」

「なるほど。ご主人様が工場で

寝泊まりしてたのはこの為か。」

「ちなみに何日ぐらい掛かりました？」

「5日間は工廠にいた。」

「まさかとは思わないですけどデータのコピー方法は。」

「向こうのパソコン、ハッキングした。」

「やっぱり。」

「ハッキング?!」

「はい。大丈夫ですよ

ハッキングした痕跡は全て消した

ので。爪跡は残して置きましたけど。」

「どんな風に？」

『ガバガバセキュリティで草。』と。」

「しいて言うなら大本営のパソコンとは

思えないほどセキュリティ、ガバガバでしたけどね。

一般人相手とか記者相手だったら大丈夫ですけど。」

「それは君のこのサーバーセキュリティが

高すぎるからだよ。」

「ペンタゴンと堂々またはそれ以上ですからね。」

へ(；・ω・、へ；；)(ソローリ…

「間宮さん

何持ってこうとしてるんですか？(、△、)

Σ(・ω・；)ギクッ

「ダメですか？o(*、ω*o)」

「駄目も何も貴方にはお下がりを渡しましたよね。」

(；・ω・、)

「そんな顔しても駄目です。」

「はい。では私は食堂に戻ってますね。」

「後で食べ行くからよろしく。」

「元帥、第2の提督を排除が完了しました。」

「いつの間に。」

「私の携帯で命令内容発信して。」

「向こうにいる川内が実行したと。」

「そうですね。」

「遺体は散りひとつ残さず消えましたけどね。」

「ではこれにて失礼します。」

「せいぜい頑張っつてね。」

〈移動準備→移動中〉

「それは簡易分解して積んどいてくれ。」

「そっちの砥石は慎重になー」

「分かりましたー。」

「第六の子達の準備は？」

「大方出来てるそうです。」

「分かった。準備出来た奴から乗ってけー。」

「全員乗り次第出していいぞー。」

「第六の子達は？」

「既に仮眠室で全員ぐっすりと寝てます。く♪

すいません。ちよつと出て来ます。」

「了解く。俺は第六の子達見てくる。」

〈仮眠室〉

「姉妹揃って仲いいなー。」

「ふみゆ？」

「はえ？」

「ほえ？」

「ふえ？」

「起こしちやったかな？」

「提督がいるく（く？▽？）く」

「なのですく。」

「ダく。」

「しれーかん。」

「ハイハイここにいるからねく。」

「うにゆく。スースー」

「さてと、仕事しますか。」

「ご主人様、夜戦バカから通信入ってます。」

「了解く」

『ちよ、誰が夜戦バカよ。』

『着いたら覚えときなさい。このピンクうさぎ!!』

『変わってすぐ罵倒とは威勢がいいな川内。』

『あつ、提督!?!えつと、これはその。』

『お前に1週間分の休暇を用意していたが』

『その必要は無さそうだな。』

『えつΣ（。D。；）、ちよつと待って、』

『これはその言葉のあやと言うか。』

『弁明は着いてから聞こう。』

『あつ待つてちよ切ろうとしないでー。』ブツ
「いいんですか？」

「自業自得だ。お前も後で詳しく聞くからな。」

「減給とかはく「それは俺が決める。」

「えく。」

「なのです!!なのです!!」

「あつまた通信だ。」

「毎回思うんですけどその着信音なんですか？」

「第六の子達を選びたいって、」

「言つてたから渡したらこうなつてた。」

「ちなみに後、何種類かあるぞ。」

『もしもーし聞こえますか？』

『聞こえてるぞ青葉。』

『提督、川内さんに何かしました？』

『気にするなあいつの自業自得だ。で用件は？』

『あつ、はいどうやら新しい提督が来る事が、

漏れてる用です。』

『何で？』

『こちらの大淀さんに電話があつたらしくて』

『大本営だな。』

『でそれを聞いた艦娘達の一部が、

提督を殺そうとしています。』

『人数は？』

『分かんないですけど駆逐艦以外は全員。』

『大淀も？』

『はい。』

『てか第2つて結構な人数居たよね。』

『確認されてるのは、

戦艦が四人、巡洋艦組は全員です。』

『海外艦は？それと海防艦。』

『両方とも無しです。まず居ないですし

それと大まかな人数が出ました。』

『何人ぐらい?』

『ざつと50〜70辺りかと。』

それと第1が深海棲艦に襲撃されています。』

『艦娘達は?』

『第1は既に、第2は動く気無しです。』

『了解。俺が援護に行くから。他は計画通りに』

『了解。』

『それと援護用の900mm拡散三式弾の準備よろしく。』

『つてまさかあれ使うんですか?』

『ダメ?』

『駄目では無いですが被害がでかいです』

『じゃあ条約ガン無視の弾にする?』

『辞めてください。』

『そろそろ戻った方がいいぞ。怪しまれる。』

『それでは、また後で。』

「漣、鎮守府に着き次第、第六の子達の護衛を。」

「全員敵ですか?」

「海外艦と海防艦は無し。駆逐艦は出ないそうだ。」

「私が殺りましようか?」

「いや、俺だけで十分だ。」

久しぶりに戦艦とやれるから血が滾ってやがる。」

「では気絶させると。」

「そうだ。その方が異動した後使えるからな。」

それに、あの鎮守府には妹がいるしな。」

「叢雲ちゃんですか?」

「そうだ。川内達が事情を話してるから証拠が早く来た。」

「鬼ですか。」

「いや、今回の事に関しては何も言っていない。」

「じゃあ、自分で。」

「だろうな。異動して直後に気付いたそうだ。」

「将来は有望な子になると見ました。」

「あいつも俺と同じ血を引いてるからな。」

「漣、移動先の準備は？」

「出来てるそうです。」

「分かった。叢雲を除く艦娘全員を気絶又は、

眠らせた上で速やかに移動する。」

「青葉さん達は？」

「駆逐艦を眠らせす用に命令は出してある。」

「了解しました。」

「そういやご主人様、お墓参りはしましたか？」

「まだしてないよ。第1で直し終わったし

まずはそれ取り行く。」

第2話

「墓参り忘れちゃ駄目でしょ。」

「それもそだな。よし着いたぞ。」

「あー、ご主人様、話そらさないで下さい。」

「ナンノコトカナ。」

後ろで人の服を掴んで引っ張っている漣を無視して言う

「総員、この場にて待機、第1から例の物を取ってき次第

突入、中に居る艦娘の無力化を謀る

その後、第1の艦娘達を長距離迫撃砲にて援護する

漣、ここは任せたぞ。」

「えくめんどくさいです。」

「ボーナス出るのに？」

「減給の方が良かった？」

「漣、任務を必ず遂行します。」

(チヨロ)

(チヨロすぎるわね)

(チヨロすぎるのです)

(?)

(ハラショー)

「じゃあ取り入ってくるわ。なるべく迅速に戻る。」

「行ってらっしゃいませー」

そしてすぐに空間を切り自転車を出しこぎ出す

「毎回思うのだけどあの空間はどうなってるのかしら？」

「ご主人様曰く幻想郷とか言う場所に居る古い友人の力を

借りてるだとか。」

くく20分後くく

《呉第1鎮守府の工廠前》

ドゴンッ

「例の物は出来たー?」

「貴方は何でこんな忙しい時に

来るんですか (「・ω・」 「 Bannon」

「だめ?」

「駄目ですよ。貴方今どんな状況か分かってます?」

「敵が攻めて来てる」

「分かっているじゃないですか!!

ともかくまずは提督にあつて判子

を貰つてきてください。」

司令室

「という訳で明石に言われた通りに来た。」

「このクソ忙しい時に貴方は何してんですか?」

「自分の武器取り来た。」

「失礼します。提督、緊急事態ですつて

白蓮提督なぜここに!?!」

「淀ちゃん (。ω。) ノ、チーッス武器取り来た。」

「それより緊急事態とは?」

「あつはい。敵戦力の中に中間棲姫と空母棲姫改を

一隻ずつ計二隻を確認。」

「嘘だろ。いくら余力があるとはいえきついぞ

白蓮先輩どうかしたんですか?」

「いや敵の目的分からなくて頭抱えてた。」

「いつもはヲ級とル級なんですけどね」

「ん、いつも?」

「毎年、お盆の時期にはこうやって

襲撃してくるんですよ。」

「追加情報持つてきました。」

「ありがとう大淀。」

「いや、まさかな」

「白蓮提督、どうかしたんですか?」

「いや、なんでもなくて追加情報というのは？」

「あつはいい、妖精さんが撮った写真ですが」

見てください。資料と少し違うんです。」

「桜の髪飾りと藍色のなんだこれ？」

「龍の髪飾り、違うか？」

「鮮明化した画像です。」

「確かに龍ですね。それも細いやつ」

「やっぱりか。」

「御麻、何分こいつらを抑えられる？」

「まあ今の状況を見ると30分が限界ですかね。」

「分かった。30分だな。」

y p a a a a a a a a a a a a a a a a !

『はい。こちら漣、ご主人様どうかしたんですか？』

『漣？作戦を急遽変更迫撃砲無しでいい。』

『提督く聞こえるー？』

『どうした川内？』

『鎮守府内の占拠終わったー。』

いやー途中でバレちゃたから上手い事説得したよ』

『そうかよくやってくれた。出撃ドックは使えそうか？』

『使えるけど何で？』

『今、全員聞いている？』

『スピーカーでマイク通してるから鎮守府全体に』

『了解。コード番号090-1006を第0全体に発動』

各艦娘は準備、又は他艦娘の保護に当たれ以上。』

『了解。』ブツツ

「じゃあ、俺は物を取って一旦、戻る。」

「ではお気を付けて。」

「明石取り来たぞー」

「分かりましたから。そこにある奴持ってってください。」

「又、後で来るわー」

~~~~20分後~~~~

## 第2 正門前

「開けてくれ。」

「ハッ」

「お帰りなさいませご主人様。」

「艦娘達は？」

「全員、講堂に集まっています。」

「よし挨拶してからすぐに出撃する。」

講堂前

「めんどくさいし取り壊すから壁壊すわ」

ボゴンッ

「何者だ。」

「おつ丁度、壇上じゃん」

「何者だ!!」

「川内、マイク」

「ここに!!」

「あーあー先程、電話で話した新しく

この鎮守府に着任する龍神白蓮少佐だ。

早速だが質問のある奴は居るか？」

「艦娘代表、長門だ。第1が襲撃を

受けていると聞いたが。大丈夫なのか？」

「何が」

「いや、全く」

「それは都合がいい。援護しなければ

責任を問われるのは司令官だからな。」

「その事に関しては平気だろ。」

「何故そう言える？」

「いや諸事情でちよつと血が騒いでる。」

他に質問のある奴は居るか？

なければ叢雲以外解散。

叢雲は壇上に来るように。」

「川内、出撃ドックは？」

「着服して私欲を満たそうとしたのか

その前の提督が付けたのか分からないけど

カタパルトデツキの存在を確認。」

「それで私に何の用よ。馬鹿兄貴。」

私にだけ出撃しろって事？」

「いや、俺も出るぞ。」

それより作戦の話をする

第1によって確認された深海棲艦は約三十隻

内二隻が姫級と確認された。」

「私を犬死させる気？」

「そうじゃない。これ見ればわかる。」

鮮明化された敵の姫級の画像だ。

お前なら分かるだろ。」

「そういう事ね。」

「まあそんな訳で艦装は必要ない代わりに

例の物の封印を解除していいよ。」

「いいの？」

「平気でしょ。仮にあの二人で勝てると思う？」

「無理ね。」

「もうそろそろ向こうも限界だから

準備が整い次第、即出撃ドックに。」

「了解ー。」



### 第3話

出撃ドック

「久しぶりだな。動きは訛って

感覚は鈍くなってるよな」

「なってないわよ。馬鹿兄貴じゃあるまいし」

「仕方ないだろ装備一新したんだから。」

「じゃあここからはテレパシーで」

「了解」

「カタパルトデッキ準備出来ました。」

「毎回思うんだけど提督のあれどうなってるの？」

「叢雲ちゃんは背中に提督と同じ物付けてるけど

違うよね。」

「提督のは全身装甲型とか言う奴、

ガンダムとかのフレーム装甲をコピーして

バックパックに記憶させた後、

全身を装甲で包む奴

ちなみに変形も可能よ」

「って事は切られたら終わり?」

「提督の場合、馬鹿みたいな再生能力あるし

即再生されるわよ。」

「叢雲ちゃんはバックパックのみでも

機動性と攻撃力は折り紙付きよ。」

「説明ありがとうございます。明石さん

でも貴方は第1のはずですよね。」

「うちの提督から伝言『もう無理だからはよ』だって。」

「叢雲先に行っていていいよ。」

「了解。叢雲出るわよ。」

「龍神白蓮、出るぞ。」

「終わった?」

「そうらしいわね。じゃあ私は戻ってるわね。」

「お疲れ様です。じゃあ私達は上に行ってますね。」

「叢雲ー聞こえるー?」

「聞こえてるわよ、馬鹿兄貴。」

「とりま、掴まれ。」

「えー。」

「そっちの方が早く着くだろ。」

「中間棲姫の方よろしくー。」

「ハイハイ。」

第1サイド

『提督、援軍はまだ何ですか!!』

『こつちに聞くな!!』

もうすぐ来るのは確認してるから』

「提督、伝聞です。」

「何だ！ このクソ忙しい時に!!」

「ワレ味方コレヨリ攻撃を開始ス」

『総員退避ー!!』

白蓮サイド

「こころら辺で良いわ。手離すわよ」

「装甲はずしてRD使うから気をつけて」

「了解。私の艀装まで壊さないでね」

敵の艀装が爆発する

そして何故か叢雲の装備も爆発する

「何であたしの兵装まで爆発してんのよ。」

「無理言うな。動けるなら」

体術に持ち込んだ方が早いだろ」

「やった事無いのにどうしろって言うのよ」

「とりま頑張って気絶させてじゃ。」

「通信切りられたし あのマ鹿兄貴!!」

叢雲サイド

「とりま頑張って気絶させるか」

中間棲姫が砲撃してくるがそれを難なく避けていく叢雲

「あの馬鹿兄貴戻ったら殴る」

「あんたは早く気絶しなさい!!」

中間棲姫のしっぽが叢雲の方を向く

「あのしっぽはまだ生きてるし!!」

「てかあれぶつければいいか」

がしっ

「せーのっ!!」 ゴスっ

「入ったかな? 動かないし、

気絶したって見ていいのよね?」

再び白蓮サイド

「近かすこうにも艦載機邪魔だしなー

能力については対策済みか。」

「ま、さすがは俺らの姉さんってだけあるわ

そう簡単には気絶しないってことか」

「まあ、癖が直りきってないのは有難いかな!!」

「急降下爆撃ばかりしていると真ん中がから空きだよ!!」 ゴスっ

「何とか気絶出来たか叢雲の方は終わったほいね

信号弾打って帰投しますか。」

第1空きドック

「ただいまー」

「遅いわよこの馬鹿兄貴!!」

「帰ってきてすぐにドロップキックとは

もつと戦いたかった?」

「あんたが艦装壊したから戦いずらかったじゃない!!」

「白兵戦の訓練だと思えばいいんじゃないね

てかそつちの気絶した中間棲姫は?」

「起きて拘束されてるけど、

何かするの?」

「元に戻す」

「やり方どうだっけ?」

「血、飲ますつか他の連中は？すげー静かだけど」

「ここの一軍、二軍ともにドック内」

明石さんが様子見、提督は上に報告中」

「第2の連中は？」

「こつちの指示に従って行動中」

てかRDするまでも無かったわね。」

「じゃ、ちよつと行つてくるわ。」

《第1地下》

コンコン

「入るよー。」

「どうぞー。」

「川内様子どおー？」

「特に変化なし。しいてゆうなら大人しくなった。」

後、しっぽ生えてる。」

「状況は良く理解してると。しっぽは想定内」

中間棲姫「早く自由にさせる。」

「流石にトップなだけあるわ。じゃあ後回しと」

川「なして？」

「だって元に戻したら抱きついてくるし。」

空母棲姫の方は？」

「同じく、しっぽは生えてない。」

空母棲姫改「運、やるなら早くしなさい。」

「おいマジか。記憶だけ戻ってる感じでいいのかな。」

空「そのようねにしても貴方も大きくなって。」

「じゃあ口開けて。」

「あー」

シュッ ぽた、ぽた

「これでいいはず。」

「航空母艦 蒼龍です。」

空母機動部隊を編成するなら私もぜひ入れてね？」

「お帰り。姉さん」

「何かすごい？してるけど」

「4年振りに再開したからな。」

まあそんな事は置いといて、んっ」

「提督？腕広げて何してるの？」

「もおー 再開して早々にハグして欲しいって

姉離れはまだまだね」

「えーと蒼龍さんこれはどういう状況で？」

「あら、貴方は？」

「川内型1番艦川内です。提督の右腕みたいな者です  
「なるほど。」

「再度、尋ねますけどこれはどういう状況で？」

「ごめんなさいね。昔から私を見ると

こんな感じに引っ付いてくるのよ」

「はえー、いつも真面目な提督からは思いつかない」

「ほーら貴方も早く離れなさい」

「やだ」

「駄々こねてないで早く任務終わらせなさい

母さんに言いつけるわよ」

「それだけのご勘弁を」

「じゃあやりなさい」

中「茶番は終わったか？」

「じゃあ口開けて」

「あー」

ぽた、ぽた

「止血してと」ムギユッ

「提督？」

「何？」

「何故またそこに？」

「定位置に戻っただけ後、安全だから」

「それはどういう意味で？」

??? 「れーんってあら居ない姉さん蓮見なかった？」

「貴方が起きてすぐどっか行つたわよ。」

「えーとどちら様で？」

「???」「あつすいません。大和型一番艦大和です」

「川内です。」

「ところで川内さん提督見てませんか？」

「蒼龍さんに引っ付いてるはずですが」

「れーん、居るなら早く出て来なさいー」

もう寝込みを襲おうとはしないから」

「やだ!!」

「蒼龍さんこれどういう事で？」

「蓮が重度のシスコンだとしたら

あの子は重度のブラコンよ」

「なるほど。それはそうと提督ーそろそろ戻るよー」

「分かったー行こ蒼ねえ」

「はいはい」

「私にも呼んで欲しいな」

「……」スタスタガチャ

「分かったから置いて行かないでー( ; ω ; )」